

昭和 25 年(1950)、^{らくだい}落第して 4 年生をもう 1 年しなければなら
なくなつた年、^{ぐうぜんはやさかふみ お}偶然早坂文雄のいところである^{はやさかれい ご}早坂礼吾と知
り合い、^{たの こ}頼み込んで^{はやさか}早坂先生に^{しょうかい}紹介してもらいました。

昭和 26 年(1951) 3 月に^{はやさか}早坂先生の門をたたいた(※44)ので
す。^{はやさか}早坂先生は^{けっかく わずら}結核を患っており、はじめ「^{おれ}俺は体力ないし、
教えるようなことはできない。」^{ことわ}と断られました。

※44 門をたたいた

^し師と^{あおく}仰ぐ人^{たず}を訪ねて、弟子入り^{たの}を頼むこと。

しかし、ここで引き下がってはならないと思い、「教えてい
ただかないかわりに、^{げっしゃ}月謝^(※44)も^{はら}払いません。草むしりでも
何でもしますからそばにおいてください。」と頼^{たの}みました。先
生は「盗^{ぬす}むのは勝手^{たの}だけど、教えはしないよ。」とのことで、
何とか出入り^{ゆる}だけは許^{ゆる}されました。

その頃^{ころ}、先生から母親^{はつよ}の初代^{はつよ}に手紙^{はつよ}が来て、「おたくの息子
が来ているが、親の死に目にも会えない仕事です。」と書かれ
ていました。初代^{はつよ}は「煮^にるなり焼^やくなり先生の思い通りにして
ください。」と返信^{へんしん}したと母初代^{はつよ}から聞きました。

※44 ^{げっしゃ}月謝

^{しやれい}月ごとに^{とく}出す謝礼、^{じゆぎょうりょう}特に^{はつよ}授業料。



母 ^{はつよ}初代

^{はやさか}早坂^{ふみ}文雄の助手として ^{はたら}働きはじめた ^{まさる}勝は、^{かばん}鞆持ちとして
^{はやさか}早坂先生に ^つ付き添って ^そ映画の ^{えいが}現場や、^{げんば}監督たちとの ^{かんとく}打ち合わせ
に同行しました。

はやさか
早坂先生からはその音楽に徹底的にオリジナリティー
てっぺいてき
(独創性(※45))を追求し、ものまねではないものを求められ
どくそうせい ついきゅう もと
ました。

また、お酒の飲み方から、人生の生き方を教えられました。

「プライドを持って。タバコを吸うならいいタバコを吸え。
す す
ひん どん
貧しても食するな(※46)。ただ食べるな、うまいかうまくない
かをわきまえて食え。心眼(※47)をやしなえ。」
しんがん

ぼろは着てても心は錦(※48)の歌詞の生き方でした。
にしき かし

どくそうせい
※45 独創性

どくじ のうりよく
独自の考えで物事を作り出す能力。

ひん どん
※46 貧しても食するな

びんぼう よくぶか
貧乏すると生活の苦しさから欲深になるなという意味。

しんがん
※47 心眼

みぬ
心の目によって目に見えない真実を見抜く力のこと。

にしき
※48 ぼろは着てても心は錦

さ ゆた
見た目はみすぼらしく冴えなくても、心は豊かであるということ。



おんし はやきかふみ お いっしょ
恩師 早坂文雄と一緒に